

「第3回 全国権利擁護支援実践交流会」報告

2015年9月5日（土）、新潟県立看護大学を会場に全国権利擁護支援ネットワーク主催、新潟県内4社会福祉協議会（燕市・佐渡市・柏崎市・上越市）の協力の下、第3回全国権利擁護支援実践交流会を開催しました。当日会場には地元新潟県内の方々をはじめ、北海道、青森、長野、富山、愛知、大阪、岡山、鳥取、大分と、まさに全国から多職種のみなさま総勢92名が参加されました。基調報告・3分科会・全体会という3部構成で、権利擁護をとりまく現状の共有、全国の取り組みの情報交換がなされました。



基調報告では、佐藤彰一さん（当ネットワーク代表）から「権利擁護支援の制度・政策等の動向」と題して、本人の意思を尊重するとはどういうことなのか、財産管理における機能不全など成年後見制度が抱える課題、虐待防止にむけた提案、社会的排除（障害者差別）を考える際の合理的配慮とは？など各分科会のテーマに重ね合わせてお話しいただきました。

◎第1分科会「意思決定支援～意思決定支援から見た成年後見制度の問題点、その先を見る～」

第1分科会は「意思決定支援」をテーマに、つい先頃まで一年間イギリス・エセックス大学の客員研究員として留学しておられた水島俊彦さん（法テラス東京法律事務所）を発表者に迎え、竹内俊一さん（岡山未成年後見支援センターえがお）がコーディネーターを務めました。

日本では「意思決定能力法」と訳される英国MCAについての基礎を豊富な映像資料を

交えて解説いただいた後、意思決定支援実践の一端として3人1組で行われた「エクササイズ」（ロールプレイ）の数々は、各セッションそれぞれが時間を大幅に短縮した言わばダイジェスト版であったにもかかわらず参加者全員が主体的かつ能動的に学ぶ機会となり、まさに当ネットワークの実践「交流」の名にふさわしいプログラムのひとつとなりました。（燕市社会福祉協議会 吉藤 則彦）



◎第2分科会「地域の権利擁護支援システムの構築と推進～権利擁護支援センター等の設置、法人後見・市民後見人等権利擁護人材の養成と活用～」

第2分科会では、各地域での権利擁護支援の取り組みの一つとして、佐渡市社会福祉協議会の実践



が報告されました。高齢化率が40%となり、深刻な後見人の担い手不足の課題について、普及啓発事業、法人後見事業の実施、さらに新たな担い手の確保として、市民後見人養成及び活動支援体制づくりへの取り組みが発表されました。佐渡島で限られた資源の中で、プロジェクトチームの結成、専門職との連携により、3名の市民後見人が選任されている状況も伺うことができました。

後半のグループワークでは、KJ法を活用し、「権利擁護支援センター等の設置・運営、権利擁護人材の育成と活用に関して困っていること、心配していること」について、グループで話し合い、課題整理を行いました。主なものとして、「センター機能」、「行政との関係性（財源、役割分担等）」、「普及啓発」、「人材確保・育成」等の課題があがりました。また、5グループからは、権利擁護支援の課題や取り組みをロケット台に例え、希望の星に向かっていくことの発表もありました（写真）。



それぞれの立場で考えている課題や権利擁護支援をどうやってつくっていくかなど、参加者同士での貴重な意見交換の場となりました。（発表者・佐渡市社会福祉協議会 須藤 信宏）

◎第3分科会「生活支援と権利擁護 ～生活困窮者支援から見えてきたこと、あきらめない、あきらめさせない支援～」

・佐渡市社会福祉協議会福祉課生活支援係 係長 末武真紀子さんの実践報告から



平成27年4月から受託している「生活困窮者自立支援事業」主任相談支援員としてかかわっているなかから、3つの事例を紹介。日常生活の中の、ちょっとした気づきや、かかわり方の工夫で、「どんな自分になりたいか思い描ける支援」を行うという活動報告でした。

【参加者のみなさんからひとこと】

・「どんな方にも意向がある」ということに、はっとさせられた。

・自身も生活困窮者自立支援事業の担当をしている。破滅の選択肢を選び続ける方の意思決定支援について、いつも悩んでいる。

- ・ご本人と家族と意向が違うということが日々ある。その時の関わり方を考えさせられた。
- ・生活困窮になることで、何の権利が奪われているのかという視点を常にもっている。生活困窮に陥ったのは自己責任と思われがちだが、選択できなかったという生活を送ってきた方も多い。

成年後見センタースタッフ、行政職員、社会福祉協議会職員など様々な立場から、感想や日々の業務で感じていることをおききし、何気ない毎日の生活の中でも、支援者が「権利擁護支援」を意識することで、選択の幅をひろげることができる可能性がたくさんあるということ、改めて共有できました。（コーディネーター・柏崎市社会福祉協議会 大塚 真光子）

その後全体会では、各コーディネーターから3つの分科会についてご報告いただき、そのエッセンスを共有しました。

アンケートからは『根本は「この人を理解したい」という気持ちなのだと思いました。過去を知り、未来をともに考える過程、このプロセスの中が重要なのだらうと思いました。』、『他地域の方々と意見交換ができ、非常に有益な時間でした。』、『相手が望む生活を送れ



るよう、伝わる表現、繋げられる支援を考えていきたい』等々、明日につなげる熱意を感じました。またいずれの分科会も魅力的であったため全部に参加したかったという声も多くありました。ご参加いただいた皆様をはじめ、開催にあたりご尽力くださった全ての皆様、本当にありがとうございました。

（おまけ）その後会場を移動し、懇親会では大いに盛り上がり、次回開催に向けて期待が高まりました。（上越市社会福祉協議会 伊崎 道子）

